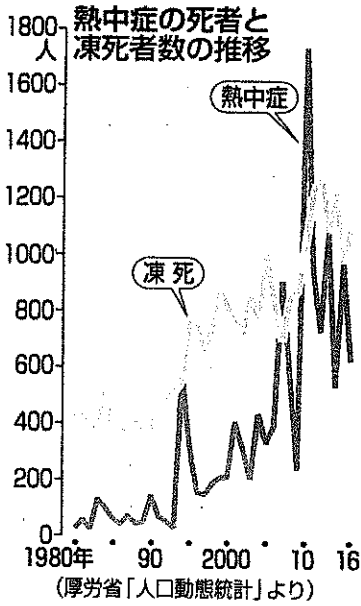


凍死、熱中症死の1.5倍

年間千人、室内で多く

大半高齢者 孤立、貧困も背景

冬は屋内の凍死にご用心。熱中症の危険性は広く知られているが、低体温症による死亡（凍死）の方が、死者数は1.5倍にも上っている。2010年以降はほぼ毎年、千人以上が犠牲となっており、大半は高齢者。室内で低体温症に陥った例が多く、背景に孤立や貧困もあるとみられる。専門家は調査や対策の必要性を訴えている。



冷え込みが厳しくなった1月末、東京都板橋区にある帝京大病院の高度救命救急センターに、意識のない80代の女性が運び込まれた。体の深部の温度が26度まで下がったショック状態。独居で認知症の症状があり、近所の人が自宅を訪ねると意識がもうろうとしていたため、救急搬送された。「低体温症に陥るお年寄り」の典型例。似た状況の人が連日のように搬送されている。同病院の三宅康史教授（救急医学）は明かした。

低体温症は、寒さで体の熱が奪われ、体の深部が35度以下

冷え込みが厳しくなった1月末、東京都板橋区にある帝京大病院の高度救命救急センターに、意識のない80代の女性が運び込まれた。体の深部の温度が26度まで下がったショック状態。独居で認知症の症状があり、近所の人が自宅を訪ねると意識がもうろうとしていたため、救急搬送された。「低体温症に陥るお年寄り」の典型例。似た状況の人が連日のように搬送されている。同病院の三宅康史教授（救急医学）は明かした。

低体温症 寒さなどで体熱が失われ、体の深部の温度が35度を下回ると、全身に障害が出てくる。35〜32度では血圧が上昇し震えが出る。32度以下では震えが止まり、意識障害や脈拍の低下などの症状が出て、放置すれば死亡の恐れがある。体温の調節機能が衰えた高齢者に起きやすく、死亡率が高い。

患者の平均年齢は72・9歳で、高血圧や糖尿病、精神疾患などの病歴のある人が目立つ。死者は161人に達していた。北日本だけでなく、兵庫県や熊本県など西日本でも多くの症例が報告されている。三宅さんは「患者の生活実態から考えると、背景には高齢化に加え、重症になるまで気付かれない孤立化や、十分栄養が取れない貧困層の増大がある」と話す。

首都大学東京の藤部文昭特任教授（気象学）によると、人口動態統計の数値の推移からもその傾向が読み取れるという。低温による凍死者数は、1980年代まで年400人前後だったが90年代から急増。低体温症に陥りやすい高齢者層の増加が要因の一つとみている。

藤部特任教授は「凍死は、これまで熱中症ほど注目されず、全体像も未解明。実態の把握と対策が必要だ」と指摘する。

になって全身に障害が起きる症状。重症化すると凍死する場合がある。厚生労働省の人口動態統計によると、00〜16年の国内の凍死者は計約1万6千人で、熱中症の1.5倍に上る。

山岳遭難など特殊な環境で起きると思われがちだが、屋内の発症例が非常に多い。日本救急医学会の4年前の調査では、全国の救急医療機関など91施設に低体温症で搬送された計705人のうち、屋内での発症は517人と7割以上を占めた。